

は似ざる形なるべし賢按、近年紅毛本草に獅子ノ圖あり、是正真なるべし。

〔三代實錄清八〕貞觀六年正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒、圓仁、俗姓壬生氏、略○中

圓仁住大華嚴寺涅槃院、經過一夏、垂至北臺雲霧滿山、徑路難尋、霧氣開霽、乃看路前見一師子、形甚

可怖畏、圓仁却走、二三里許、經於小時、更復進路、見彼師子猶在前路、蹲居不動、更復却走、二三里許、彌

增驚恐、數刻之後、亦漸進行、師子猶在不去、遙見人來、即便起立入重霧中、無復所見、略○下

〔牛馬問〕近年或僧長崎にて大清の人と度々出會し、或時獅の事を話するに、華人の曰、獅は天竺

のみにかぎらず、中夏へも折節は出る事有、其かたち和漢繪に見るとおなじからず、毛彩不潔、犬

概龍に似て、犬サも又大なる犬ほど有、此もの若出る時は、虎の猛といへども、總身をちやめ地に

仆れて、四足を空にし、口をあき、目をふさぎ、死せる者のごとくにして、動く事なし、獅是を見來て、

開たる口の中へ小便をして、徐に歩み他に行、虎すこしも不動、凡そ道の五六町ばかりも行つら

んとおもふ比眼を開て、獅の後かげを見て、いよ／＼他に行を見て、則起て逃去事、尤見苦しき有

様也、虎さへも如此、況や其餘をや、故に今清の代にて、搜瓶シロビンの事を虎口といふとなん、

〔倭名類聚抄毛十八〕虎群名、說文云、虎名乎古反、和山獸之君也、

〔箋注倭名類聚抄獸七〕按、宣四年左傳云、楚人謂虎於菟、方言、虎江淮南楚之間、或謂之於羆、王念孫

曰、今江南山邊呼虎爲羆、則知於羆之於發語、猶謂越爲於越也、然則和名止良之止即羆、良助語也、

○中 略 原書同、說文又云、虎从虍、虎足象人足象形、按虎虎文也、亦見說文、李時珍曰、格物論云、虎狀如

猫、而大如牛、黃質黑章、鋸牙鉤爪、鬚健而尖、舌大如掌、生倒刺、頂短鼻、

〔類聚名義抄七〕虎呼古反、ト、ラ、和コ、

〔干祿字書上〕虎上聲、席虎上通、下正、

〔日本釋名中〕虎、とらはとらゆる也、人をとらゆる獸也、

虎